シベリア

露西亞と土耳其とは、浴場の發達した點で、世界に名だゝる國であるさうな。彼得堡でも、莫斯科でも、浦潮でも、雲を凌ぐ大厦高樓を構へた湯屋が各所に在る。洗湯もあれば、蒸氣浴もある。男の三助も居れば、女の三子孃も居る。怪しかることもある、怪しからぬこともあると云ふ。

汽車の中の入浴などは、恐らく世界中に餘り類があるまい。湯錢の二留は高いに相違ないが、西伯利亞の野原の眞中で、温浴が出來て、烟に薫ぶつた身を一洗し得るといふは有難いことである。尤も所によつて、偶水の惡い所にでも行合すと、半濁水の湯に入らせられることがある。僕も今日は、幸と清水に入るを得たが、往路では、隨分ひどい湯の中へ入つた。

彼此一時間も入つて後、愈渾身の垢を洗ひ終つて、如露の湯を浴びる。此の如露の湯では、往路にえらい失策をやつた。何しろ半濁水である上に、洗ひ落した石鹼の垢が浴槽に滿ちて居るので、一應古い湯を棄てゝ、さて浴槽の中に立つて、如露の螺釘を捻ぢた。恐しい熱い湯が颯と頭からかゝる。之は堪らぬと、今度は其の隣の螺釘を捻ぢる。今度は氷の樣な冷たい奴が落ちて來る。さア大變、僕は震へ上つた。仕方がないから、其處等に數々取り附けてある螺釘を、滅茶苦茶に捻ぢ回して見ると、之はしたり、今迄は、罪もなげに風除の內側に取りつけられて、唯其の柱代りとばかり見えた例の眞鍮製の管が、其の實盡く如露であつて、此が横筋違に入方から冷たい冷たい西伯利亞の寒中の水を雨の樣に注ぎかける。僕はびッくり敗亡、左ながら出出しの下女が眞綿と摑み合ふ格で、宜しく眞裸體で水とつかみ合つた樣、誠に講にも書かれた義理でない。寒くはある、水の爲に眼は見えず、唯もう旨滅法界に手さぐりで、其處等中に在る限りの螺釘を盡く閉めて、やつと助かつた。今思ひ出しても吹出したくなる。

餘りの馬鹿々々しさに、今迄誰にも話さなかつたが、此には何かの御參考にもと一寸讀者限りお耳に入れる。新聞なんどに出してはいけない。

△イルクーツク

八日目の午後五時、イルクーツクに着く。往路では、プラットフヨームの直向ふ側に新しい列車がちやんと待つて居たから、乘替の手續は甚だ簡單で濟んだが、今日はさういふ譯に行かぬ。仕方がないから、赤帽に運ばせて、僕等五人の荷物を一應プラットフヨームに持出した。此の邊には、服裝の如何はしい男がざわ〳〵と烏路つくので、萬一間違が有つてはならぬと、一行中の最も慮病な僕が、握り太の杖を斜に構へて、荷物の見張をして居る。いざとなつたら、逃げ出すだけの用意は如才なく整へてゐる。

西村ドクトルと廣瀨君とは、カメンスキー少尉と連れて、寢臺車の番號を聞きに行く。之は新に乘り替へる列車の車室が分らぬので、寢臺切符を持つて行つて、之に番號を書き入れて貰ふのである。夫れが何處に行つて書き入れて貰ふものだか、皆目分らぬ上に、日本人は日本人だけで、成るべく同じ部屋を取りたいし、若し又出來るならば、例の將校連と

客車だけは一所にしたいといふので、態々カメンスキー少尉を引張つて行つた譯である。但し、之はカ君の盡力で、首尾よく僕等の望み通り、同じ車に部屋を取ることが出來た。何につけても陸軍に限る。

相馬君と富田君とは、停車場へ書端書を買ひに行つた切り、何時迄待つても歸らぬ。僕一人心細くも、ちよんぼりと荷物の傍に立つて居ると、寶石商の猶太人ポリアコフ君が來て、そんなやかましい顏をしてなくても赤帽に任せてさへ置けば大丈夫だといふ。元來露西亞の停車場には、時々贋物の赤帽が居て、うつかり之に物を預けると、飛んでもない目に遭ふ。眞物の赤帽は、グラニツアで見た通り、白い前垂に丸い眞鍮の番號札を胸にかけて、汽車が着くと、大勢プラットフヨームに列んで、件の番號札を片手に示しながら、客の命令を待つて居る。客の方で其の番號を見て置いて、之れに荷物の數だけ明かに言ひ聞かせたら、後は乘てゝ置いても大抵間違はないとのことだ。斯なことなら、何も杖を斜に構へる必要はなかつたのである。今更斜に構へたり何かしたのが馬鹿臭くなる。

シベリア

ボリアコフ君に連れられて、構内の電信局へ電信を打ちに行く。ワルシャウから一所に成つた英吉利の僧ツエブスター君も、後から來る、辯護士も來る、士官も來る。電信局の具合は、日本の樣に小さな窓から賴信紙を投げ込むのとは、餘程風が違ふ。此の大勢が、失敬とも何とも言はずに、づか〳〵と電信技手の部屋へ押しかけて行つて、どッかと椅子に腰を下して、此處で悠々と電報を書くのである。狹い部屋が直一杯になる。技手は格別五月蠅さうな顏もせず、其の側で仕事をする。ツエブスター君の奉天宛の電報が、此處から打てるとか打てぬとかで、大分やかましかつたが。技手は此の忙しい中を彼地此方電話で問ひ合せて、やつと打てぬことを確めた。如何な場末でも、露西亞は矢張露西亞である。

技手といふは、二十許の土耳其風の美人。

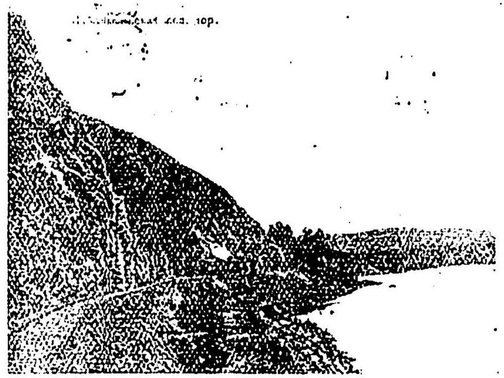
其うち車室の番號が分る。知合の客は大抵同じ客車に入ることになる。赤帽を促して、長い〳〵プラットフヨームを過ぎて、新しい列車に乘り替へる。乘替は事なく濟んだが、列車は中々出ぬ。今度のプラットフヨームは、丁度貝加爾湖から流れ出るアンガラ河の岸に沿うて、對岸にイルクーツクの市街を一目に見渡す所である。僕等は列車を出て、河岸をぶら〳〵する。氣淸く風涼しく、丸で小春の空のやうな。イルクーツクは、西伯利亞中の健康地として名高い所で、古來未だ曾て一人の肺病患者を見たことがないといふ。

停車以來正に二時間と五十六分經つて、初めて日暮方に此處を發車した。次なるバイカル停車場で日が全く暮れる。風次第に吹き荒んで、湖岸に打つける波の音がぶ、、、ぶちやんぶちやんと聞える。

△バイカル湖岸

今夜はいよ〳〵バイカル湖にさしかゝるといふので、乘客孰れも申し合せたやうに、急に臥床には入らぬ。十時過に成つて、僕は食堂へ茶を飲みに行くと、丁度陸軍將校が八九人卓子を取り卷いて、、、、、きやッきや言つて騷いで居る。僕は遠慮して、隅の方に小なく成つて居たが、やがて其中の一人の將校が、僕をヤポンスキー〳〵と呼びかけて、そんなに其

方向かずに、此方向けと手眞似でいふ。仰の通り此方向く。



バイカル湖岸

知り合ひの陸軍大尉が眞中に立つて、何か滔々と辯じて居る。其の四圍には、士官が七八人と、之れも莫斯科以來乘合せた辯護士やら、ポリアコフ君やら、其の外食堂の給仕や厨夫なんどまで、之を取圍んで傾聽して居る。何の演說だか一向分らぬ。頓て大尉の命令で、給仕が麥酒の空瓶を持つて來る。大尉は之を逆さまにして、とん〳〵と卓子の上で叩く、聽衆一同に廻す。一同は之を逆にしたり、電燈に透して見る。大尉が再び之を手に取ると、聽衆の中からヤポンスキー〳〵と呼ぶ者がある。何でも日本人にも見せよといふのらしい。又僕の處へ瓶を持

つて來る。僕も一寸改めて大尉に返す。何やら大尉が手品をして見せる所と、合點が行く。大尉は、吸ひさした卷煙草を瓶の中に入れた後、又もや之を一同へ回して、改めさせる。僕の處へも持つて來る。今度は衣嚢から麻の手巾を取り出す。ぱつと叩いて見せて、又一同に回して改めさせる。一々僕の處へ持つて來る。うつかり僕の所へ持つて來るのを忘れると、ヤポンスキー〳〵と呼ばゝつて、見物が承知せぬ。

大尉は手巾で瓶を包んで、徐に兩手で捧げて、アレキサンドロミハイロウキッチ、ワリヤーグ、レトツキザン、ウラジヲストックだか何だか、變な呪文を長々と唱へる。一同は片唾を呑んで見て居る。頓て呪文終つて、手巾をめくり上げると、今迄瓶の底に在つた卷煙草の吸さしが、何時の間にやら瓶の口に上つて來て居る。大尉は一寸摘んで、口に銜へる。一同は感嘆して手を拍つた。ポリアコフ君、僕の方を向いて、ベリ、グードといふ。ボ君は英語を話す。僕も、グード、インデイードと合槌を打つ。其の內負けぬ氣の士官は、之を眞似て見る。一向行かぬ。皆笑ふ。呪文を馬鹿に長々と述べて、さも勿體をつけて眞

似るが、一向旨く行かぬ。一同は益〳〵笑ふ。はては半巾に包んだ瓶を、勢ひつよく上下に振り動かすと、中なる卷煙草は高く飛び上つて、外に出た。皆々又どつと笑ふ。其の賑しいことは、西伯利亞の眞中とも覺えぬ位。

部屋に歸つて、臥床には入つたが、外面が變に明くて寢られぬ。窓掛の隙から覗くと、汽車は今しもバイカルの岸にかゝつたとおぼしく、湖水の影が微かに見える。水面に映する星の光が薄月夜の樣に明るい。汽車は隧道をぐわら〳〵と潜る。之を出ると又ぐわら〳〵と鐵橋に滑り込む。隧道と鐵道とが、かたみ代りに引續くこと幾十回。丁度函根を通るやうな。線路は湖岸の絶壁を縫つて、或時は其腹を、或時は其の脚を走り回ること、て、紆餘曲折頗る甚しく、曲る毎に汽車はがあと音を立てゝ、大ゆれにゆれる。何でも、畫間此邊を通れば、あはや水の中に落ち込みもやすると、手に汗を握ることが幾度かあるといふ。對岸には、停車場と覺えて、さら〳〵と列んだ電燈の光が水に映つて居る。丁度、芝濱から品川停車場を臨んだ樣で、夫が行けども〳〵、依然として眞正面の對岸に在る。

星が盛に飛ぶ。夜は正に二時。

△車中の日清談判

今度乘り替へた列車の食堂に、支那人が一人居る。之が少しばかり英語を話すので、散散露西亞語でいぢめ拔かれた僕等は、頗る重寶に思つて、多少目をかけてやつた。所が、此奴のづう〳〵しさ加減といふのは、大抵のことでない。金でも貰ふ時だけは、莞爾々々して、何やらお世辭も言ふが、其の外は無愛想千萬な面をして、ぷん〳〵と濟まして、用事を命けても、決して眞面目には聞き入れぬ。金を拂つて剩餘でも殘ると、剩餘の中から宜しく先づ五文十文自分の方で差引いて置いて、其の儘チップの積でくすねる。催促すると、にたりと笑つて、呉れても宜さうなといふ樣な顏をする。手嚴しくはたると、澁々卓子の上へ放り出して、見向きもせずに行つて仕舞ふ。忌々しいなどいふ段ぢやない。丁度イルクーツク乘替の翌日、夕餐の時に燒家鴨を注文すると、此奴が何だか變な鳥の燒いた

のを持つて來た。何も家鴨らしくない。何だと聞くと家鴨だといふ。こんな家鴨があるかと怒鳴つても、矢張り家鴨だといふ。何と言つても鴨、鴨、と答へる。ダクでもない奴だ、癪に觸つて堪らぬ。念の爲に料理部屋から生の儘を取寄せて見ると、果して脚の長い鴨の樣な鳥で、家鴨でも何でもない。之でも家鴨かといふと、矢張り家鴨だといふ。人間も斯う出て來ると、最早議論にならぬ。流石の山の著と鰻の合の子共も、之には業を煮して、青筋を立て、怒る、卓子を叩いてどなる、家鴨ならば水掻もわり脚もずつと短いといふ動物學の講釋もする。色々手をかへ品を代へて、歐羅巴七八箇國を跨いで來たしたゝか者一同が、躍氣となつて談判して見たが、結局彼は依然として、家鴨で押し通して、何と言つても改むることを知らぬ。流石の僕等も、之には我を折つて、とう〳〵議論は物分れとして散いて、其の以來此の支那人には口も利かず金もやらぬといふことで、腹癒をするに決した。決しは決したが、さて食堂の給仕に口が利けぬほど、此方に取つて不便のことはない。とう〳〵滿洲里迄も行かぬ中に、此方から降參して、口を利くことになつた。日清談判の日露談判よりも六ケしいことは、之でも思ひ當る。間島の境界も、撫順炭坑の所有權も、日本郵便物の拒絶も、下手をまごつけば、皆鴨になる。浮世の作法といふものがなくてあれ、斯ういふ奴は毆るに限る。

所で、其の翌日の夕方線路に故障が出來て、汽車は突然ブイロックといふ小さな驛で留まつた。留まつたきり、何時間經つても發車せぬ。宵の內こそ、停車場に下りて、食堂で茶を飲んだり、書草紙屋を素見したり、プラットフォームを歩いて、乘合の客と言葉を交したり、いくらか氣紛かしも出來たが、夜が深けるに連れて、停車場は閉ぢて仕舞ふ。乘客は車に歸つて仕舞ふ。殆ど何のせん方もない。さりとて、迂濶と臥床へ入つては、此の荒野原の眞中の小驛で、而かも橋が燒け落ちたなどゝいふ物騷な話を聞く折柄、何時强盜に見舞はれないものでもない。十時と過ぎ、十二時となると、腹が空つて來て、目がぼんやりとして來る。幾度食堂に出かけて見ても、固く鎖して押せど叩けど手答へはない。カメンスキー一行が、例の通り騷いで居るので、何か食ふ物はないかと問へば、今平げた許り

シベリア

の所と、麥酒の空瓶を三四本見せられるばかり、一向初やらぬに其處へ折よく知り合ひの陸軍中尉が廊下を通りかゝる。食堂に行くらしい。早速呼びとめて、手眞似で麥酒のことを語り出すと、中尉は皆まで聞かずに驅け出した。やがて、食堂の戸を破れよと許り打敲く音が聞えて、引續いて、大聲に何やらん、怒鳴りつける聲が洩れたが、間もなく、中尉は麥酒を六七本兩腋に抱へて、給仕に盃を六つ許り持たせて、意氣揚々として歸つて來た。

何うしても露西亞を相手の談判の方が、埒が明き易いと見える。

△シベリア終る

フイロックには十二時間停車して、翌朝未明に、初めて車が動き出した。

十一日目の朝滿洲里に着く。荷物の檢査もせねば、疎菜切符の買纒にとて、停車場に入ると、出札所は午前九時といふに、まだ閉つて居る。其の翌日は哈爾賓に着く。此の邊からは大分日本臭くなつて來て、線路に沿つた街道に何とか樓といふお茶屋が有つて、洋裝

の日本の女が門に立つて居る。此處で知合の客が大分下りる。

翌十三日目には、ポグラニチナヤに朝の六時半に着く。此處で、荷物の檢査が有る筈だといふので、早くから其の支度をして、待つて居たが、とう〳〵沙汰がない。停車場の食堂に行くと、給仕が盡く支那人で、益故國に近い趣を添へて來る。

ポグラニチナヤは、西伯利亞鐵道中切つてのむづかしい驛名である。滿洲里から哈爾賓を經て此處迄は支那領で、此處から浦潮迄は又露西亞領になる。此の邊には大分日本人も入り込んで居る。西伯利亞の荒野の樣は、此處に來るとがらりと變つて、至る所、青山綠水が見える。

九時半頃浦潮に着いた。迎へに來て呉れた社の金村君に連れられて、一同宿に着く。

翌七月十三日には、大阪商船會社の鳳山丸が午後二時に出帆するといふので、十一時頃から一同と乘込んだ。鳳山丸は昨日初めて浦潮に入つて、今日しも初めて浦潮を出るのである。初航海のことゝて、波止場は殊の外賑しい。日本人の乘客も大分ある。送つて來た

シベリア

金村君が、けた〻ましく僕を呼ぶので、急ぎ甲板に出て見ると、揃ひの浴衣を着て、揃ひの日傘をさした女が二十人許り、棧橋を通つて居る。先頭に洋服姿の若い男が立つて、之と列んで、友禪縮緬のはでなのを着た女が歩く。聞けば、此の男は浦潮の女郎屋の亭主で、其の相列んだのは自分の妾。後に隨ふ廿餘人は自分の店の女郎だといふ。之だけ聞いても、痰でも吐きかけてやりたくなるが、今日しも此の男が日本に立つといふので、其の店の女郎に揃ひの浴衣揃ひの日傘で、愛妾と共に見送らせた所だと聞くに至つては、呆れて物が言はれぬ。凡そ人間恥を知らぬは禽獸である。恥を名譽と心得るに至つては、ムシケラ（本字を書く價がないから、假名にする。）である。斯んな奴が、浦潮邊で幅を利かせて居る樣では、戰勝國も何もあるものかい。

不埒なるは之ばかりでない。棧橋附近を徘徊する女の中に、一種の饅頭賣がある。紺飛白の着物に、だらしのない腰紐をゞめて、編笠を被つて歩く。饅頭賣とは世を僞る假の名で、其の實は波止場人足の支那人や露西亞人に、十文二十文で淫をひさぐ醜業婦中の極醜

なる者である。此等は孰も福井縣越前國三方郡西郷村の女共で、漁業出稼といふ廉を以て、福井縣から渡航の許可を得た者ださうな。之が來てから、良家の日本婦人迄が時々誤られて、甚だしい迷惑をすることがあるといふ。

不埒なは女許でない。浦潮邊には、本國で食ひ詰めた遊手無職の民が、ごろ〳〵と入込んで、眞個の進取的良民が折角經營しかけた事業を片端から妨害して行く者が大分ある。斯ういふ手合が何かの行違ひで喧嘩でもすると、直相手を間諜と言つて、露國官憲に通じる。之が爲に、根も葉もない所に間諜問題が起る。其の日露兩國民の關係を阻礙することは一通りでない。

午後二時十五分、波止場のどさくさを後に見て、愈汽船鳳山丸は浦潮を出發した。思へば、三月十二日以來ドーバーの外は大陸にばかりくつ附いてゐた僕の足の蹠が、久しぶりで又もや、日本海の水の上へ浮び出る。

大英游記 終

送杉村無懷居士之歐洲　　入竺宗演

嗚哉無懷子、藏筆向歐洲、鵬摶數千里　雲揚全地球、
或伸時或屈、宜勉亦宜休　好望如春海、對君憶昨遊

五十音索引

凡例

一　總目次中に見出し得ざる記事を參照するの便に供せんが爲五十音索引を附す

二　五十音索引は字音に據る、假名遣ひの規則には拘はらず

五十音索引

ア

アールスコート博覽會　一四三—一四五、一四七—一四八
赤帽（露國）　一六五、一六六、一六九
アボン川　一六、一四五、一四六、一四七、一六六、一八一、一八三
アンダスン（英人、ゲワンド、マガザン主筆）　一四九—一五一、一五六
アレキシンスキー（露國社會民主黨首領）　一六

イ

池田蘇花　三三
イルクーツク　二、三六—三八
岩井ドクトル（顧問）　一四九

ウ

維也納　一六六—一六八、一九三—一九五
ウエブスター（英國の僧）　二四一
ウヲータールー（故戰場）　一六〇—一六三
ウヲリック城（英國）　一九五—一九九
馬　九—八三
浦潮斯德　三、四—六、二九—三二
ウラル　一六、三二—三三
ウルップルヒの電車　一九九
ウヲルガ河　一三

エ

英國議會　八五—八九
英國皇帝　一九六
英國大使館　一九五
英國の田舍道　三三
英國の女　一四六、一八一、二〇二
英國の巡査　七七、八三
英國の女中　九六
英國の秩序　八七、九一、九六、一二四
英人の好意　八九—九〇、一〇一、一〇三
エレベートル　一二四

オ、ヲ

オルダーショット（英國）　一九六—一九八
ヲルフソン（露人、同行の客）　三二—三五

カ

カート、ホース、ショー　[illegible]—[illegible]
ガーベストンの碑　[illegible]—[illegible]
カイゼル（海逸皇帝を見よ）
ガイ（サキソンの將）　[illegible]、[illegible]、[illegible]—[illegible]
ガイス、クリツフ（英國）　[illegible]—[illegible]
加藤ドクトル（寛）　八、[illegible]、[illegible]
カムブル、バナマン（英國首相）　[illegible]—[illegible]
觀兵式　[illegible]—[illegible]
カメンスキー少尉（露人）　[illegible]—[illegible]、[illegible]、[illegible]
鴨事件（汽車中）　[illegible]—[illegible]
カレー乘替　[illegible]
カリンガム（下宿の主人）　[illegible]—[illegible]
河合英忠　[illegible]

キ

「君が代」　[illegible]、[illegible]—[illegible]
汽車（英國）　[illegible]—[illegible]、[illegible]—[illegible]
記者倶樂部　[illegible]—[illegible]
汽車の乘替　二、[illegible]、[illegible]、[illegible]—[illegible]、[illegible]、[illegible]—[illegible]
ギルチネーン（英國商人）　[illegible]
ギルド、ホール　[illegible]—[illegible]

ク

グールデン大尉（英人）　[illegible]、[illegible]、[illegible]
クラニツア驛（墺露國境）　[illegible]—[illegible]
栗の花見　[illegible]
クリーディー（英國陸相秘書官）　[illegible]
クリスチアン、サイエンス　[illegible]、[illegible]
クロパトキン將軍　[illegible]、[illegible]
クロムウエル　[illegible]—[illegible]、[illegible]、[illegible]
クロムウエル、ハウス　[illegible]、[illegible]

ケ

ケニルウォース城（英國）　[illegible]

コ

コベントリー市　[illegible]—[illegible]
小村書記生（後三郎）　[illegible]
コンペア（同宿の客）　[illegible]—[illegible]、[illegible]、[illegible]
婚禮　[illegible]—[illegible]

サ

坂田總領事（重次郎）　[illegible]
酒手　[illegible]、[illegible]—[illegible]、[illegible]—[illegible]、[illegible]、[illegible]
索引（タイムス）　[illegible]—[illegible]
酒　[illegible]—[illegible]
サットン、プレース（英國）　[illegible]—[illegible]
サベーチ倶樂部　[illegible]、[illegible]
サンドウキッチ　[illegible]—[illegible]

シ

醜業婦　[illegible]、[illegible]、[illegible]—[illegible]、[illegible]、[illegible]
ジエームス大尉（タイムスの記者）　[illegible]—[illegible]
シエフキールド市　[illegible]—[illegible]
時間の相違「時」を見よ
自動車　[illegible]、[illegible]、[illegible]、[illegible]—[illegible]
シベリア鐵道　[illegible]—[illegible]、[illegible]—[illegible]
　案内記　([illegible])
　延着　([illegible]—[illegible])
　案内　([illegible])
　食事　([illegible]—[illegible])
時間　([illegible]—[illegible])
速力　([illegible])
停車場　([illegible]—[illegible]、[illegible])
入浴　([illegible]、[illegible]—[illegible])
列車　([illegible])
　列車の構造　([illegible]—[illegible])
ジヤック、ロンドン（米人）　[illegible]
ジョーンス（英人）　[illegible]—[illegible]
「新聞屋」　[illegible]

ス

スコツト（タイムス記者）　[illegible]、[illegible]、[illegible]
スタインバーグ（英人）　[illegible]—[illegible]
ストーンレー、アベ（英國）　[illegible]、[illegible]—[illegible]
ストラスブルヒ市　[illegible]—[illegible]
ストラトフヨード、オン、アボン　[illegible]—[illegible]
スリップ、カー　[illegible]

セ

稅關　[illegible]—[illegible]（滿洲里）[illegible]—[illegible]（ケラニツア）
瀬山藤（純化英人）　[illegible]—[illegible]、[illegible]—[illegible]
潛航艇　[illegible]

ソ

相馬半治（明治精糖會社員）三二、三三

タ

タイガ驛　三
大名の屋敷　三六、三七、一四九
タイムス社　一四八—一五〇
「タイムス」の投書　一三三—一三四
煙草　一九—一八
「旅の恥」　一三三—一三四

チ

チエリアビンスク驛　三三—一三四
蓄音機　二六、三四—三六
チップ　「酒手」を見よ
ヂプシー　三三
チャータース（タイムス記者）　一四九、一五一—一五三
チャールス一世　一三〇、一三三
チャンドラー（英人）　一五八—一六〇
チロル（タイムス記者）　一三三

ツ

ツアルスコエ、セロ（露國）　三

テ

デオシー（英人）　五六、六四
手品　一三三—一三四
デビス（英人）　一三四—一三七、一三七—一三八、一三八、一三八、一二〇—一二四
手眞似　三三、一三五、一三一

ト

冬宮　五
ドーバー乘替　一三五
同業の好意　三一
獨逸議會　五九—六〇
獨逸皇帝　四五—四二
時　九、四三、九六、一〇三、一五六、一三八—一三九、一三〇
富田熊藏（山中商會員）　三二、三三、三八、三九
トリビユーン新聞　九三—九六
ドレッドノート艦　六八—七一

ナ

ナイチンゲール　一三七—一三八
ナポレオン　一三六

ニ

西大將　一三四—一三六
西村ドクトル（靖次）　三四、三五、一三七
荷物檢査　八（露）二〇—二二（露）四三（佛）一三六（佛）
　二二（獨）五九（獨）一五八—一五九
日英同盟　三三—三六、一二—一二、一三〇、一三三、一三三
日曜（倫敦）　八三
日本海　二
日本倶樂部（伯林）　四三
日本語　一三〇—一三六、一三八、一三八—一三九
日本字　九三—九六、一三六
日本式庭園　一三九—一四一
日本式寢室　一三〇
日本人倶樂部（倫敦）　一四一—一四四
日本職工雇入契約　一三二—一三三
日本刀　一三六
日本と英國　一九—一二三
日本の歴史　一九一—一九二
日本村　一六八—一七〇
日本料理　四三、一四二

ノ

ノースクリツフ卿（メールの社長）　一〇三—一〇六、三一、三九—三二

ハ

ハウス、ゴースト　一三六、一三〇
ハヲース大尉（同宿の客）　一〇三—一〇四
バーミンガム市　一三三—一三五
バーシー卿（ガイス、グリツフの持主）　一三〇—一三一
バーナード夫人（英人）　一九—一三、一三八
バイカル湖　一〇、一三四—一三五
賣女　「酌婦を見よ」
箸　一九三—一九五
バツクル（タイムスの主筆）　一三七
花　一三六、一三八、一三六、一三七
萬國醫學軍會社　七、一六八、一六四、一六六、一三三—一三四
巴里　四三—四九

パルク　三四
哈爾賓　三六

ヒ

ピアノ　三三
ビー娘(同行の客)　一三二—一三七
ビー夫人(同宿の客)　一八九—一九二
ビクトリー(ネルソン乗艦)　七〇、七二—七三
廣瀬茂一(尼ヶ崎紡績會社員)　三四、三六—三八
ヒンチンブルーク城　一四八—一五二

フ

フーバー(タイムスの記者)　一五二
フーバー大尉(タイムスの通信員)　六六—七〇
ブームラン　三四
フイロック驛　三七、三七—三八
伏見宮殿下　五一—五四
佛語　三一—三二、三六、三七、三八
葡萄酒事件(汽車中)　三五—三九
ブラウン(タイムスの記者)　一五五—一六六
ブラッセル市　一三七—一三九、二三一—二三二、二三三
ブリースツ、ルーム(倉庫)　三六
ブレイン(タイムスの記者)　一三一、一三二—一三五、一三六—一三七、一三八、一三九、一四一—一四二、一四六、一四七、一四八、一五二
ブレスツキー驛　二〇五—二一〇
フレッチャー中佐(タイムスの通信員)　六九—七一

ヘ

ペイン夫婦(同宿の客)　一七一—一九九、二二二—二二四
ベル(英人タイムスの總取締役)　一七一、一七九
白耳義　一七一—一七五
伯林　一五、一七—一八二

ホ

鳳山丸　一四九、一五一
ポーツマス　六八—七四
ポグラニチナヤ驛　一四九
ポリアコフ(露人、同行の客)　六八—七四

マ

マクドナルド(英國大使)　五二、五六
マッカラ(米人、大阪毎日の通信員)　三二—三七

マックラカン夫人(英人)　三九—一五五
マッケンジー(メールの記者)　一〇六—一一四、二二九—二三〇
マンション、ハウス　六三
滿洲里(マンチュリー)停車場　八、一八—二二
馬屋原商店(浦潮)　八
マレー大佐(ヨーク公陸軍幼年學校長)　一六四—一六五

ミ

木乃伊　一九四—一九五
「ミカド」　一〇六—一一四
ミンク(同宿の客)　一〇〇—一〇四、二二二—二二四

ム

ムーア、ゲート　八三—八五
武藤精次郎(同行の客)　二

メ

メール　一〇三—一〇九、一一三—一一七、一一八
「メール」の投書　一〇三—一〇九、一一三—一一七、一一八、一八五

モ

莫斯科　一八、二二—二三五
モンク　三六、一三三—一三五、一四二—一四三、一四五

ヤ

八代海軍大佐　四三—四五
ヤング(英人、ジャパン、クロニクル主筆)　八三

ユ

幽靈　「ハウス、ゴースト」を見よ

ヨ

ヨーク、ハウス　五五
ヨーク公陸軍幼年學校　五九、一六四—一六六

ラ

ラッヂウヨース自動車會社　一三三—一三五

リ

リツル(英人)　三三—三七
リツル夫婦(同宿の客)　二〇四—二〇九、二一二—二一三
リンチ　(元クロニクル從軍記者)　七五、一六一—一六二

旅行券 三、[illegible]、[illegible]—[illegible]、[illegible]—[illegible]、[illegible]、[illegible]、[illegible]—[illegible]

レ

レー卿(レミントン領主) 三八、[illegible]
レミントン市 [illegible]—[illegible]

ロ

ロートン兄弟(英人) [illegible]—[illegible]
露語 [illegible]
露國議會 [illegible]—[illegible]
露國總領事館(維也納) [illegible]—[illegible]
露國將校 [illegible]—[illegible]、[illegible]—[illegible]、[illegible]
露人 [illegible]—[illegible]、[illegible]—[illegible]、[illegible]
ロビンソン [illegible]—[illegible]
露兵 [illegible]—[illegible]
倫敦 [illegible]—[illegible]
倫敦の下宿 [illegible]—[illegible]、[illegible]—[illegible]

ワ

ワルシヤウ [illegible]—[illegible]

明治四十年十二月廿九日印刷
明治四十一年一月一日發行

○定價 金壹圓
○郵稅 金十二錢

著者 杉村廣太郎
東京市麴町區有樂町三丁目一番地
發行者 田中源三郎
東京市京橋區築地二丁目廿一番地
印刷者 守岡功
東京市京橋區築地二丁目廿一番地
印刷所 株式會社 國光社

發行所 東京市麴町區有樂町三丁目一番地
有樂社
電話本局二〇九五
振替口座三六〇

許複製

有樂社五大雜誌

東京パック
（毎月一日二十日發行 北六パック十日發行）

定價 一部十三錢以上 十部前金一圓廿五錢郵税 三部前金二圓四十錢税共 三圓五十錢

東洋一の大漫畫雜誌、世の歡迎非常にして今や東西兩洋に跨り十萬餘の讀者を有す。奇警痛快滑稽、滑脫の妙を極む、主筆は漫畫界の泰斗北澤樂天氏たり。

フレンド
（毎月一日發行）

定價 一部十錢以上 六部前金五十五錢郵税 三部前金一圓（共税）

東京パックは其の愛子と盲ふべき本誌を新年學頭初産を爲せり。面白く可笑しき裡に通俗學術の智識を敎ふる興味多き雜誌也、主筆はお馴染の樂天先生!!!

英學界
（毎月五日發行 定期增刊年四回發行）

定價 一部十錢以上 增刊一部二十錢郵税 半年八冊九十九錢郵税 一年十冊一圓八十八錢（共税）

皆が折れず氣が疲れずに英語を勉强せんとするものは本誌を師とせよ如何なる無精者も二三ヶ月本誌を讀まば其面白味につられて不知々々大の勉强家となるべし。其の一面白く樂みて英語を勉强する雜誌」との本誌の主義實に宜へなる哉である

日本エスペラント
（毎月五日發行）

定價 一部十錢以上 六部前金五十五錢郵税 三部前金一圓（共税）

第一等國の仲間入りせし日本人は、世界共通の言語たるエスペラントを學び置く必要あり。本誌は秩序的に此語學の組立文法を敎へて倦まざる東洋唯一の獨創的雜誌也。

東西南北
（毎月一回發行）

定價 一部拾五錢 六部前金八十五錢郵税 三部前金一圓四十六錢（共税）外に郵税二錢五厘づゝ一部に付一

人皆寸秒を爭ふ今日、一ヶ月毎に海の内外に於ける出來事と新智識とを一目の下に諒解せしむるもの獨り本誌あるのみ。他の大新聞と共に併讀せば比類なき時勢通となるべし、

有樂社發行著名書目（英文）

○英文書類

英譯 不如歸 德富蘆花 榮譯
元東京毎日新聞記者 東京帝國大學文科大學講師 木下尚江著 アーサー・ライド博士譯
四六版 洋裝 全一冊 美本 定價金六拾錢郵税六錢

英譯 良人の自白 故尾崎紅葉山人著 東京帝國大學文科大學講師 春陽堂藏版 アーサー・ライド博士譯
四六版全三冊洋裝美本 定價 一卷六十錢 二卷七十錢 三卷 郵税四錢 近刊

英譯 金色夜叉 村井弦齋著 吉田奈右譯
四六判全三冊洋裝美本 定價 一卷上製一圓四十五錢 二卷並製一圓七十錢 第三卷 未刊

英譯 紀文大盡 英譯
四六版 定價 全一冊 金五十錢 郵税 金四錢

英文詩集 日本魂 伯爵大隈重信君序文 國民新聞主筆德富猪一郎君序文 東京市長尾崎行雄君序文 米國スター・ゲ博士著
定價金壹圓 小包料金十錢 アートペーパー刷 密語二十餘枚上等グロース表裝 頒美本

第二高等學校教授デニング譯 繪本太閤記
英學界編輯局編纂
四六版 全一冊 定價 金一圓四錢 小包料 金八錢

英譯 官職名集
第四高等學校講師 カントレット 學習院教授 丸山順太郎共著
定價 金十錢 郵税 金二錢

世界語
文學士 黑板勝美 哲學博士 淺田榮次 安孫眞次郎共編
定價 金三十五錢 郵税 金四錢

エスペラント日本語辭書
定價 金五十錢 郵税 金四錢

有樂發行近刊書目

新西洋笑府

和田垣子氏

四六版二百餘頁ハイカラ製本挿入絵畫石版鋼版木版コロタイプ版セラチン版總計八十餘個定價金一圓郵稅八錢

諸君をして一切の憂、一切の憂、一切の病を忘れしむべく和田先生が新著歌米嬉樂書中より、落語の粹を抜きて流麗の譯筆に錦を飾られ、樂天先生が瓢の漫畫に花を加へられたる實に出版上の三美具有の書物たり

堺利彦 編

平民科學

全部六册毎編讀切四六版毎編百七八十頁定價一册金三十錢郵稅廿四錢六册金一圓卒錢郵稅廿四錢

最近科學の思潮を説くに、平民的文字と平民的情緒とを以てしたるもの、智識と趣味と最も善く此篇中に融和せり

全六册目次左の如し（毎月一回發行）

第一編　人間發生の歴史（既刊）　堺利彦
第二編　植物の精神（既刊）　山川均
第三編　男女關係の進化（一月發刊）　堺利彦
第四編　動物の道德　幸德秋水
第五編　地球の生滅　志津野又彦
第六編　萬物同根一族　堺利彦

英作文構成法

山口高等商業學校教授佐々木文美先生著

附錄答解の部共全二册　定價金三十五錢　郵稅金四錢

（賞品券附き）

英作文の大家佐々木文美先生の英學界の爲めに超絶せられた英作文法や既に版を重ねること幾度の書となさんも事なれども、讀者の之を聚めて一卷の書となさんを求むる頗る切なるものあり、逢に先生に請ひて周密なる加筆を得、更らに毎章十數題の練習例題と其答案とを加へて上梓することゝなれり。江湖英作文研究の必要を認めて而かも其困難なるに苦しめる士は速に來りて本書を求ぶべし、刪等が積年索めつゝありしなる指導に依りて容易に其堂奥に到達する事を得んか、叮嚀なる指導の熟練なる案内によつて開かれ、英學界編輯部編纂

英文英語叢書

全六册毎册讀切定價一册金二十錢郵稅四錢前金壹圓郵稅八錢

而白く樂みて英語の勉强が出來ると云ふのが雜誌「英學界」編輯の主意で、此叢書も無論其主義で編輯されたのである、で心持ちの宜い程組のきいた書物で中學一二年程度の讀者にも、無論一讀巻が措く能はざる珍書である

全六册分類左の如し

第一册如何にして余は英語を學びしか　第二册大人物の少年時代　第三册世界新聞　第四册やさしき會話と對話　第五册英文手紙の書き方　第六册東西お咄噺

全部一册一月一日を以て發賣す

再版

大阪朝日新聞所載 人物評

菊版二百五十餘頁
定價　金四拾錢
郵稅　金六　錢

大阪朝日新聞編輯局の所謂不等邊三角形の卓上に編せられたる畫傳なり、而して畫傳子の觀察、不等邊三角的にして文字不等邊三角的なり、不等邊三角的とは果して何の謂ぞ、蓋し此書を讀まざるものは解し能はざるなり。

其人を知るものは、其傳記を讀まんと欲し、其人を慕ふものは其傳記を知らんと欲す、この書收むる人物、今人を主とし、古人を從とす、貴賤男女を別たず、畫傳子の觀て人物となすものは網羅し、或は直覺に、或は側面に、縱横評論記述す、一人を讀めば更に一人を讀まんと欲して、卷を終へ尚足らざるを思はしむ、文字の巧なるにあらずして何ぞ、撰擇宜に適せるに非ずして何ぞ。

挿入百人百個の寫眞、英雄、豪傑、賢哲、美人皆諸君を書齋に訪ふ、豈快ならずや。

發行所

東京市丸の内有樂町
振替口座三六〇

有樂社

著郎太廣村杉冠八楚

七花八裂

定價六拾錢 郵税八錢

著者曰く此書は著者が名に畏れず憾に泣かず半錢の債を負はず半人の愧を負はず天上天下一點半塵も他の掣肘威壓を受くることなくして縱に我が見得底な披瀝せる者、過去十三年間の惡文惡詩收めて此の一卷の中に在り、著者の如く貧乏し著者の如く墮落せんと欲する者は請ふ此書を讀め

東京市小石川區原町六番地

鷄聲堂發行

振替口座一三五三

63
9

63
9

026848−000−1

63−9

大英遊記

杉村　楚人冠／著

M41

ADF−0029